

研究授業報告

－「生徒による授業」にチャレンジ－

たなだ たくろう
店田 卓郎

1. はじめに

個人的な話であるが、高校1年生の時の担任の先生のお話が頭に残っていて、それが今回のチャレンジの基礎になっている。「勉強と学問のちがいについて —— 勉強は他人から与えられた問を解くもの、学問は自ら得た問いについて解明していくもの」という内容であった。なぜ自分は勉強しているのか、なぜ人は学ばなければならないのか、という疑問を抱いて悶々としていた私に、少し光が差した瞬間だった。それから約30年経つ。2020年公示の新学習指導要領・第4章「総合的な学習の時間」の項目の冒頭付近に「自ら課題を発見し解決する力」の旨の文言が見られる。これが「学問とは自ら得た問いについて解明していくもの」との、高1年時の担任の言葉と強く結びつくところであろう。そもそも、「自ら課題を発見し解決する力」とは1996年7月の中央教育審議会の第一次答申で『生きる力』の骨格の一つとして位置づけられて以降、現在まで継続して教育活動の「基本的なねらい」とされているものである。ただ、具体的には「総合的な学習の時間」でしか「自ら課題を発見する力」に言及されていないことには、不思議の感があった。例えば国語という教科でもそれは追求できるのではないかと。

また、教員になってから複数回、様々な研修の機会に「生徒が生徒に授業する」という実践報告に触れることがあった。しかしそれらの現場で見学させていただいた実践は、生徒がグループで調べてきたことを一方向的に発信しているのみであり、「これは生徒による“授業”ではなく“発表”ではないか」との違和感があった。特に現代文の授業は生徒の発信・表現機会を確保することが肝要で、教師から生徒への一方向的な知識注入では生徒に何らかの力をつけさせているとは言えない。そのため、やはり発問の質によって生徒の知的な好奇心を刺激し、生徒の発信・表現意欲を引き出すことが、我々国語教員の重要命題ではないか。生徒に“授業”させるならそこまで追求したいし、自ら課題/問いを見つけ解明してゆくプロセス、さらにそれを他者と共有し理解に導くプロセス、の喜びを味わわせたい、と考えるようになったことから今回の取り組みに至っている。それらのことから、以下のことを生徒に強調して要求し、今回の実践を始めた。

あくまで「授業」であって発表ではないので、以下の設定を守ること。

- ①発問からのスタートを基調とする。その問いは自ら探し調整すること。
- ②授業者の口から一方的に解などを提示してしまわない。双方向的なコミュニケーションによって生徒（役の生徒）から解を引き出せるよう、導き方を工夫すること。

2. 生徒の反応

具体的な実践内容は次ページからの学習指導案をご参照頂きたい。ここでは実際の取組後の生徒アンケート結果を掲載しておく。「手応えあり。今後もこの取り組みを継続させよう。」と思っている。実際の記述回答内容についても「読解力、コミュニケーション力、協働力、表現力、構成力などがついた。」「教えることが何よりも最高次元の学びであると知った。」などの実感的なコメントをたくさんもらったことを報告しておきたい。

- ①『生徒による授業』に取り組んで、力がついたと思いますか？以下から選んでください。
「4大変力がついた」37% 「3少しは力がついた」61%
「2あまり力はつかなかった」2% 「1全然力がつかなかった」0%
- ②『生徒による授業』をやった良かったと思いますか？以下から選んでください。
「4大変良かった」46% 「3少しは良かった」52%
「2あまり良くなかった」2% 「1全然良くなかった」0%

国語科学習指導案

大阪教育大学附属天王寺高等学校
指導者 店田 卓郎

1. 指導日時 令和3年8月下旬～令和3年11月上旬
2. 指導場所 大阪教育大学附属天王寺高等学校 各HR教室
3. 主題「生徒による授業」にチャレンジ
4. 単元目標
 - ・本文を多角的にとらえ、自ら問いを立てて分析する力を養う。
 - ・国語に親しみ、それを他者に伝達する力を養う。
 - ・他者と協働する力、ともに探究・創造する喜びを知る。
5. 単元の実際の学習について

5-1. 協働学習として（国語科中高共通テーマ）

本単元では、文字通り「生徒による授業」を課した。あくまで「授業」であって発表ではないので、以下のことを強調して要求した。

- i 発問からのスタートを基調とする。その問いは自ら探し調整すること。
- ii 授業者の口から一方的に解などを提示してしまわない。双方向的なコミュニケーションによって生徒（役の生徒）から解を引き出せるよう、導き方を工夫すること。

例えばインターネットで調べてそれを報告するというような次元の作業ではないため、準備段階での負担はかなり大きく、個人レベルでできるものではない。そのため必然的に班員同士が協力し合って授業を「創って」いく状況を意図的に設定もした。恐らく彼らにとって、一つの文章をこれほどまで深く何度も読み込み、他者と討議し共有する経験はなかったと思われる。コミュニケーションや協働力といった部分にも有効に働きかけができると考えられる。

5-2. 実際の「生徒による授業」について

店田が出席を確認し、数点連絡などした後、各グループの授業に入る（各グループ持ち時間は35～40分）。その後（生徒役の）生徒は評価シートを記入し、コメントや質問も書く。その後店田から授業内容の補足や講評をする、という流れで実施した。先述の評価シート上で質問や（授業担当の）生徒からの回答を通じて問答がなされており、店田が興味ひかれて口を挟むケースもある。質の差はあるが、授業者だけでなく（生徒役の）生徒も前向きに取り組み、生徒はまずまず楽しんでくれているように感じられた。

5-3. 今後の展望

実際の「生徒による授業」場面では、ディベートやジェスチャーゲームなどの活動的学習機会を取り入れたり、こちらが感心するような質の良い発問を繰り返す場面が多数みられた。また、準備段階でも生徒たちはよくグループで店田の所へ来て長時間粘り強く問答を繰り返していた。さらに、事後アンケートでは98%近くの生徒が「この授業を通して力がついた」「この授業をやってよかった」と回答してくれており、手ごたえを感じている。次年度以降も「生徒による授業」を実践したいと考えている。（生徒から「是非後輩たちにもこの経験をさせてあげてください！」とのコメントも頂いた）それに向けて事後アンケートや生徒の提出物など分析し、改善点を整理しておきたい。現時点では、準備段階でのグループ間での交流機会の確保が必要であったかもしれないと感じてはいる。各段落で切れ切れの授業内容になってしまうと、段落間の構成的・内容的つながりを学習する機会を減らしてしまうと考えられるためである。

6. 単元の指導計画

第一次 導入

第一時（8月31日）告知と本文配布

今年度も「生徒による授業」を実施することとそのスケジュールを告知した後、この時点の座席表に従って、まずは各クラスを7グループ（5～6人ずつ）に分けた。本年度は『ミロのヴィーナス（全3段落）』『現

代日本の開化（全4段落）』を扱うと伝え、まずは個々人で本文を熟読させた上で、どの作品のどの段落を担当したいかグループで意見交換させた。

第二時（9月3日） 担当作品，担当段落決定

各グループから担当作品，段落の希望を出し合い，重複するところはジャンケンなどして最終決定した。クラスによっては話し合いで決めたケースもあった。そして各グループ授業準備に入った。

第三時（9月14日） 授業準備

各グループで本格的な授業準備に入った。生徒たちは『i 発問，ii その解，iii その解の論理的根拠・説明』をグループ内の討議によって確立させてゆく。店田は随時巡回し声掛けや助言，軌道修正しつつ全体の掌握に努めた。また，各時間の最後には「生徒による授業・準備シート」を提出させ，毎回添削，助言などして，グループ討議が停滞しないようにサポートした。

第四時（9月17日） 授業準備

前時の作業の続きを行った。店田も前時と同様の関わりを続けた。

第五時（10月1日） 授業準備

コロナ休校や教育実習生の授業期間を挟んでブランクによる影響も考えられたため，生徒も店田も第四時までと同様の作業，関わり方を再開した。

※ここまでは授業時間を割いて確保した。これ以降は各グループが昼休みや放課後（もしかすると帰宅後にオンラインなどでも？）などに自分たちで作業時間を確保し，作業を進めた。また，店田のところへ積極的に質問に訪れ，一時間弱も粘りつく場面も複数あった。

第二次 展開～まとめ

第六時～第十二時（10月8日から11月9日）

『5-2. 実際の「生徒による授業」について』に記載した流れで実際の「生徒による授業」を実施した。各授業日の夕方には店田はグーグル・クラスルーム上で「その日の学習内容」と「授業担当グループによる特徴的な取り組みの紹介」をした。また，各授業終了時の「(生徒記入) 評価シート」のやりとりを一読し，気になる問答があれば，店田からもコメントを記入した。

最終回の授業終了時には今年度の取り組み全体を総括して口頭とグーグルクラスルームで以下のようにフィードバックした。

- i 昨年度よりも私のところに質問に来てくれる頻度や質問内容の深度が数倍向上していたし，みんな明るい表情で取り組んでくれていて担当者としても嬉しく感じていた。
- ii 実際の授業機会にも
 - ①一方向ではなく，生徒との双方向的なコミュニケーションにより導く努力・工夫
 - ②ゲーム等の活動を取り入れた学習形態の工夫の2点で明確な変化があり昨年度からの成長が感じられた。これらから大きな手応えを感じている。
- iii その後，グーグルクラスルーム上での「事後アンケート」への協力を呼びかけ，「生徒による授業」完結とした。